

少年ジェイムズのヨーロッパ

序

(51) 少年ジェイムズのヨーロッパ

周知のように、ヘンリー・ジェイムズの想像力においてヨーロッパが果たした役割は測り知れず、いわゆる「国際テーマ」(“international theme”)はジェイムズの小説世界の中で、とりわけ初期において中核のひとつを成している。しかし、「国際テーマ」の作品を論じる¹とき、その執筆時点におけるジェイムズのヨーロッパ理解の程度が意識されることは少ない。たとえば、一八七四年に発表された「国際もの」のひとつ“Madame de Mauves” (「モーヴ夫人」)は、ヴェイガリンをはじめとする一般的な理解では、アメリカとヨーロッパのモラリティの対比、「アメリカ的理想主義が持つ誠実さ」と

町田みどり

「フランスの現実主義」の葛藤と解釈されているが、実際ジェイムズがこのときフランス人のモラリティについてどこまで理解していたのかという点は話題にされる²ことがない。

しかし、伝記的事実は、ジェイムズのフランス人の理解について疑問を抱かせずにはいられない。この作品が執筆されたのは、一八七二年から一八七四年にかけての五度目のヨーロッパ滞在中のことである。妹と叔母のお供として春に渡欧したジェイムズは、二人と各地を旅行して回った後、二人の帰国後もヨーロッパに残り続けるが、このときバリーに滞在したのは、一八七二年の秋から暮れにかけてのごくわずかの期間である。また、このとき、父親に書き送った手紙の中で「レストランの給仕が

目下のところ私の主な社交相手です」と言っていること、また兄ウィリアムには「パリでは、典型的なフランス人と一言も言葉を交わす機会がなくて、とても残念でした。好奇心が満足させられないのを感じ続けている内にだんだん苛立ちを感じるようになりました」と書き送っていることから、フランス人との個人的な交わりはほとんどなかったということが推測される。またそれより二年前の一八六九年から一八七〇年にかけての十五ヶ月間の滞在でもイギリス・スイス・イタリア旅行が中心でフランスには立ち寄る程度であった。とすれば、ジェイムズのフランス人理解の現実味にはいささか疑念が生じてくる。しかし、この問題に疑問が差し挟まれない理由としては、ひとつには、後年のジェイムズのコスモポリタンな作家というイメージに影響を受けて、既にヨーロッパに精通しているという錯覚を起こしている、あるいは、成人前に三度渡欧しており、合計すれば五年間をこの地で過ごしているという事実から、ジェイムズのヨーロッパ理解を暗黙の前提にしているということが考えられるだろう。とすればその三度の訪問の内容が問題視されなければならぬことになる。三度の渡欧の内、第一回目

は一八四三年から一八四五年にかけてなされ、イギリスとフランスに約十五ヶ月滞在、第二回目は、一八五五年から一八五八年にかけて、イギリス、スイス、フランスに約三年、第三回目は一八五九年から一八六〇年にかけてスイスとドイツに約十一ヶ月滞在している。第一回目は生後十ヶ月の時点でなされたものであるため、実質的には第二回目、ジェイムズ十二歳から十五歳にかけての三年にわたる滞りが彼にとっての初めての意味のあるヨーロッパ体験ということになる。本稿では、ジェイムズとヨーロッパとの交渉の出発点である、この第二回渡欧を中心に伝記的事実を検討し、いかなる形でのヨーロッパ攝取がなされたかについて考察することにする。その際、ジェイムズ家の特殊な教育にも光をあてる。

1 出会いと奇妙な放浪

ヨーロッパとの意識的な最初の出会いにおけるエピソードはきわめて象徴的である。一八六五年六月二十七日ニューヨークをあとにしたジェイムズ一家は七月八日にリヴァプールに上陸し、ロンドンへ向かう。しかし、上陸早々運の悪いことにヘンリーは発熱し、「パンチ」誌

やディケンズの小説を通して子供の頃から憧れていたロンドンを見物するどころではなく、ホテルのベッドで一日を過ごす羽目になる。そのようなわけで、自伝的作品 *A Small Boy and Others* (『少年とほかの人々』) でヨーロッパの思い出として最初に回想されるのは、リヴァプールの風景でもなく、ロンドンの町並みでもなく、このベッドで過ごしたひとときである。

私がとりわけ思い出すのは、病状もよくなり看護の手を必要とせず、ひとり部屋に残されたときの、つかの間ながら甘美なひとときだ。病床の私を囲むそのロンドンの部屋は重厚な暗示を放ち、部屋の匂いそのものも古めかしく、初めて経験するもので、印象的であった。まったく新しい啓示であった。そして、六月のイギリスに向かって開き放たれた窓からは、数しれぬ可能性がざわめきとなって彼方から聞こえてくるのであった。私は意識でそのあまたの可能性を味わった。思うに、このときはじめて、そのように味わうために、ある様相を前にして固唾をのんで待つという最大の快楽を経験したのだ。⁽⁴⁾

ニューヨークから約十日の船旅の果てにお預けをくらい、ランバート・ストレザーよろしくバルコニーから外を眺めようとしてもそれすら許されないヘンリーは、時間的にも空間的にも対象から遠ざけられている。しかし、視覚による享受さえ禁じられたことが、逆に全身の感覚を研ぎすませ、嗅覚と視覚、そして意識を最大限に働かせることで、埋め合わせがなされたのである。つまり、ジェイムズとヨーロッパとの最初の接触とは意識を通しての間接的なものであったということである。

間接的な接触体験はこのエピソードだけにとどまらない。結局このマラリア熱は尾を引いて、ヘンリーは夏の間中ずっと行動を抑制されることになる。断続的に発熱に悩まされるヘンリーをいたわりながら、目的地ジュネーヴに到達したジェイムズ一家はロシア女性の屋敷を間借りする。「疲れないよう、歩き回る範囲を定められた」ヘンリーと世界をつなぐ窓口となる役割を果たしたのは、「自分より優れた生きるための才能」に恵まれた弟ウィルキーであった。さっそく、この女主人と「大いに親しくなった」ウィルキーは、「彼女の正体や過去、行動や

習慣全般についてのさまざまな伝説」をヘンリーに聞かせてくれ、ヘンリーはそれを抛り所として彼女を「遠くから眺める」(一六二) 他なかったのである。また、学校生活についても同様であった。健康な状態ならば、他の三人の兄弟と共に寄宿学校に入ることになっていたが、それもかなわない。家に取り残されたヘンリーは、ひと足先に入学した兄弟たち、とりわけウィルキーから学校生活の様子を聞かせてもらうことで満足しなければならなかったのである。

ここで今回のヨーロッパ滞在の目的を確認しておこう。それはウィリアムをはじめジェイムズ家の子供たちによりよい教育とりわけ外国語の教育を受けさせることであった。ヨーロッパでの教育という考えは一八四九年頃から既に父ヘンリー・ジェイムズ・シニアの頭の中にあり、エマソン宛の手紙には次のように述べられている。

：四人の丈夫な子どもたちには、室内遊戯室がなく、街の子供に染まって恐ろしく行儀悪くなっているさまを、嘆かわしく見ていると、子どもたちと数年外国へ行って、フランス語やドイツ語を吸収させ、ここで得

られるよりましな感性教育を受けさせるようにしてやるほうがいいのではないかと真剣に考えているのです。⁽⁵⁾

当時ジェイムズ一家が住んでいたニューヨークは、一八四五年頃から飢饉のためアイルランドからの移民が急増していたばかりでなく、一八四八年カリフォルニアでの金鉱発見を機に、大量の移民が殺到し、騒然としていたことを考えれば、ヘンリー・シニアがエマソンにもらした不安も納得がいく。スイスのジュネーヴを目的に定めたのは、当時スイスの寄宿学校は評判が高かった上、親類キング一家が既にジュネーヴに住んでいたということ、また従兄弟がヴェヴェイの学校で教育を受けていたという理由があったためである。⁽⁶⁾ 教育を目的としたジェイムズ一家のヨーロッパ生活をしばらくおってみよう。

ジュネーヴでは快復期のヘンリーと妹アリスを除く三人の子供たちはレディゲ氏の寄宿学校に通うことになる。

ヘンリー・シニアは、デイルー・トリビューン誌に二度にわたって文章を寄せ、この学校を賞賛していたが、二ヶ月も立たぬうちに失望を覚え、ヘンリーが全快するのを待つこともなく、教育の場は——外国語修得が目的の

渡欧であったにも拘わらず——なぜかロンドンに移される。ロンドンでは、友人のガース・ウィルキンソンから、節約には家庭教育の方がいいというアドバイスもあったためか、学校へやることはせず、十一月半ば頃新聞で募集して雇ったスコットランド人家庭教師ロバート・トンブソン氏にラテン語その他一般的な教育を任せ、肝心のフランス語はジュネーブで雇われ同行してきた女家庭教師クザン嬢に任せることにされた。ヘンリーたちは、授業が終わった後、ロンドンの街を歩き回り、ロンドン塔や動物園、美術館やマダム・タッソー館を訪ね、少なくとも、ヘンリーにとっては意義のある日々を送っていたが、それも束の間であった。

翌年ヘンリー・シニアは突然パリに移動する決心をし、一家は六月パリに居を移す。パリへ移動してからは、家庭教師も全く新しく入れ替わり、今度はトンブソン氏に変わって、詩人志望のルランペール氏がウィリアムとヘンリーの教育を、クザン嬢に変わってダンス嬢が弟たちの教育を引き受けることになった。ルランペール氏の授業の後には、ロンドンの時と同様に、兄と二人で、パリの街の散策を楽しみ、ルーブル美術館へ足繁く通う毎日

であった。しかし、ルランペール氏は四、五ヶ月で、解雇され、その冬から翌年の春にかけてウィリアム、ヘンリー、ウィルキーの三人は、フェザンディエ学校というフリーエ主義者の実験的學校に通わされるようになる。この學校は、フフランステルと呼ばれる生活共同体に近いもので、性も年齢も国籍もバラバラの者が共にフランス語を学ぶ、下宿と語学學校が一体になったような一風変わった場所であった。

この年の三月にアメリカでは金融パニックが起き、ジェイムズ一家もその影響を受けて儉約を迫られることになる。そこで一家は夏の初めに、避暑と儉約を兼ねて、ブローニュ・シュルメールという海辺のリゾート地へ移動する。七月頃からヘンリーはウィリアム、ウィルキーと共に、コラージュ・インペリアルという「どんな貧しい家の子供も拒まれることのない大変民主主義的な學校」(二三五)へ通うようになる。自伝によれば、地元の公立高等中學校の母体となるものであったようで、土地の商人や職人の師弟が等しく肩を並べて勉強していたという。もっとも、ヘンリーはほんの数週間しか通学していない。なぜならば、八月半ばにチフスにかかり、

およそ二ヶ月間生死の間をさまようことになったからである。この間ジェイムズは部屋から一步も外にできることができず、ひたすら回復を待つばかりであった。

ジェイムズの回復を待って、一家は十月半ば過ぎにパリに戻るが、パリは物価も高く、財政状態はますます悪化する一方であったため、十二月の初め、再び家賃の安いブローニュ・シュルメールに戻り、翌年六月にアメリカに帰国するまで、この地にとどまることになった。ヘンリー以外の三人の兄弟は再びコラージュに通い、体が回復しきっていないヘンリーだけは、週日三時間だけ、家庭教師から授業を受け、ついに学校へ戻ることもないままヨーロッパ滞在を終えるのである。結局、この三年間の滞在中、ジェイムズ家の子供たちは三つの学校を転々とし、ひとつの学校に通った期間は、長くて半年という状態であった。ここでは詳しく取り上げなかったが、家庭教師の方も、次々と変わり、ジェイムズは六人もの家庭教師の名前を列挙しながら、「学校が次々変わったのもどういふ主義に基づいてなのか分からなかったが、家庭教師の方もなぜこう頻繁に変わったのか想像がつかない」(二七三)と述べている。

もともと、このように、およそ一貫性に欠けた「教育放浪」⁽⁸⁾は、このときがはじめてというわけではなく、既にヨーロッパに来る以前から経験されていたのである。

渡欧前に住んでいたニューヨークでは、「*Dame school*」と呼ばれる婦人が自宅で開く私塾をいくつも移り変わり、その数たるや「今日私に驚嘆の念を引き起こす」(一一)ほどであった。ジェイムズたちは、「同じ学習の場には：一冬以上通うことはなかった」(一四)という。また、学校の性質も一様ではなかった。一八五二年の秋から主に仏語を学ぶ目的で通い始めたのはメキシコ人やキューバ人の子供が数多く在籍している学校であった。怒声が交わされ、教室では本が飛んできたことを記憶していると記しているくらいであるから、相当すさまじい学校であったことは容易に想像される。翌年通うことになったのは、前年の反動のせいかわずと静かで、「年若い紳士たち」(一一)のための学校で、内容も教養を高めるにふさわしいものであったようだ。しかし、その翌年ヨーロッパへ旅立つ直前の冬には、ヨーロッパ行きがほぼ決まっていたにも拘わらず、また別の、今度は簿記の理論と実践を教える一種のビジネススクールのようなところ

ろへ通わされるといふ始末であった。

2 父の教育信念

このように「痛ましいぐらいの支離滅裂」(一七二)な教育が施される背後には一体どのような意図があったのであろうか。宗教思想家である父ヘンリー・シニアは、まとまった形での教育論は残していないが、ステイヴン・デューハースト(Stephen Dewhurst)という仮面を借りて語られる未完の自伝に有力な手がかりを見いだすことができる。この自伝では、特に信仰心の発達に主眼をおいて幼少期の回想が語られると同時に、家庭や教会への批判が展開されている。ここでは終始一貫して「自発性」(spontaneity)の重要性が主張され、その自発性を妨げるものとして制度・ドグマティズムが厳しい批判の対象とされる。エマソンの「自己信頼」の思想の影響が色濃くいこの教育観の中でも「無垢」に関する見解はジェイムズ家の子供たちの教育を考える上で示唆に富む。ヘンリー・シニアは「無垢」は「人の魂の品性が自由に発達することに不可欠」であるという確信から、次のような結論を導き出している。

幼年期が将来の成人期に対して有する大きな価値は、幼年期が、無知に基づく無垢で自然な感情や愛情の宝庫であるということだ。これらの感情は、その後の精神生活や自由の発展にとっての素晴らしい神聖なる雛形あるいは拠り所となってくれるのである。従って、子供の中にある幼児らしい無垢と無知の期間を無慮に短縮する限り、将来の大人としての人格を獲得する機会を損なってしまふのである。⁽¹⁰⁾

ここでヘンリー・シニアが「無垢と無知の期間」を「無慮に短縮」してしまう有害なものとして念頭においているのは「家庭や教会や世間」の「影響」である。つまり、人格形成のためには、これらのものから受ける影響をなくし、「無垢と無知の期間」が短縮されないようにすることが必要だということになる。ジェイムズ家が特定の教会に属さなかったことはもちろんのこと、度々学校を変え、家庭教師すら頻繁に変えたということもこうした信念が根底にあったものと考えれば納得がいく。ヘンリー・シニアがジェイムズたちに施した教育とは、

「家庭や教会や世間」から、社会や国家からすらも、すなわち自己の外にあるもの全ての影響を受けずに、人間の内部に生まれつき備わっているものを、「自発性」にまかせて一切のものから制約を受けぬ自由な精神を育てるといふ試みではなかっただろうか。⁽¹¹⁾一定の場所に長期間いれば、あるいは一定の人物と長時間接していれば、必然的に特定の影響を受けざるを得ない。従って、どのような影響をも避けるためには、絶えず動いていること、絶えず移動することが最良の策ということになる。もともと、ヘンリー・シニアは、遺産のおかげで、職業とは全く縁がなかったため、子供たちはビジネス一色に染まっていたアメリカ社会からは解放されていたが、その解放は、アメリカ合衆国という土地そのものを離れることで完璧になったのである。⁽¹²⁾

3 子供たちの批判

父の教育信念をジェイムズ家の子供たちがどこまで理解していたかを知る術はないが、一貫性に欠けているようにしか見えない教育は、ヘンリーはさておき、他の子供たちにとって歓迎されるものではなかったようである。

ウィリアムは、外国語を学ぶために渡欧したにも拘わらず、まともな学校にもいかせてもらえず、代用として家庭教師をあてがわれ、授業後は街をひたすら歩き回るだけといったロンドン・パリ滞在を「お粗末で、空っぽの嘆かわしい時期」(一七〇)と不満をもらしていたことをジェイムズは記憶にとどめている。アリスは、後年、ウィリアム宛の手紙の中で、ウィリアムの子供たちには「私たちの送った根無し、偶然の連続であるような子供時代」をもたらしような「過ち」を犯さぬよう忠告し、「私たちのように、連続性がなく、ちょっと時がたつたびに根こそぎにされているのなら、子供は、心や記憶を豊かにできるでしようか。」と述べ、父親の教育方針をはっきりと批判している。⁽¹³⁾

ジェイムズ自身はどうかと言えば、これほど明白な批判の態度を表していないが、父の教育の計画性のなさを意識していたことは確かである。ジェイムズ一家は、一八五八年の帰国後、わずか十五ヶ月後に、再度教育の目的で渡欧しているのだが、『少年とほかの人々』と*Notes of a Son and Brother* (『息子と弟の覚え書き』)では、その十五ヶ月が全く省略されて、あたかも一八五

五年から一八六〇年まで、とぎれることなくヨーロッパ滞在が続いたような印象を与える書きかたがなされているという事実は注目⁽¹⁴⁾に値する。これについてエデルは興味深いエピソードをジェイムズ伝の中で紹介している。

ジェイムズは、『少年とはかの人々』の出版された年に、自分の父親がヨーロッパとアメリカとをあてもなく衝動的に往復しているという印象を読者に与えたくないので一八五八年に一旦帰国したという事実は書かなかったのだと甥に語った。それに対し、甥が十三歳からずっと五年ヨーロッパで育てられるのと、その間に十五ヶ月間をアメリカで過ごすのでは大きく違うと主張したところ、ジェイムズは一笑に付し、その十五ヶ月間には何も起こらなかったと答え、甥は叔父が父親ヘンリー・シニアの移り気や衝動をかなり意識しているという印象を受けたという⁽¹⁵⁾。

しかし、その省略された十五ヶ月の間には何も起こらないどころか、ジェイムズの人生にとって最も重要な出会いが起こっているのだ。一八五八年夏の初めに帰国したジェイムズ一家は、ニューポートに居を定めたが、ここでヘンリーは、生涯にわたって友情を交わすことにな

るトーマス・サージェント・ペリーそしてジョン・ラファージュと出会ったのである。ペリーは二歳年下であったが、大人びており、読書歴も知識も豊富、ヘンリーが初めて出会った自分と嗜好を同じくする同年代の少年であった。ヘンリーは、まもなくペリーと同じ学校に通うようになり、ペリーの回想によれば、二人は午後になると毎日あちこち長い散歩をして、フリーエの思想について話し合ったり、英文学雑誌や書評を読んだりしたという⁽¹⁶⁾。八歳年上のラファージュは、絵の才能があったばかりではなく、文学の素養も深く、ヘンリーにバルザックやメリメの小説を紹介し、フランス文学に開眼させた。この時期のヘンリーに最も影響を与えた人物といってよいだろう。ジェイムズ自身、ラファージュが自分の教養を高める上でどれほど重要であったかわからないと認めており、『息子と弟の覚え書き』では、何頁にもわたって賞賛の辞を綴⁽¹⁷⁾っている。

ジェイムズはこの十五ヶ月間を『息子と弟の覚え書き』の中で一八六〇年の帰国後のニューポートでの生活の記述に巧みに滑り込ませて、ペリーやラファージュとの交際を描き出している。その点では、ジェイムズの

文学への道の重要な標石とも言うべきこの十五ヶ月は、完全に省略されてしまったわけではない。しかし、あたかも存在しなかったように書くことでジェイムズは父の「移り気」の他にもう一つある事実を隠蔽している。それは、一八五九年再度渡欧するに際してのペリーやラ・ファージュたちとの別れである。後に詳述するようにヨーロッパでは、友人らしい友人がほとんどいなかったジェイムズたちにとって、彼らとの友情は何にもまして貴重なものであった。それゆえ、再び友人の全くいないヨーロッパへ向かうジェイムズたちは、ペリーたち以上に別れを辛く感じたのではないだろうか。⁽¹⁸⁾ また前回の渡欧に比べ、今回は三年の滞在の後であるから新味も失せており、むしろ新しくできた友人との交際の方がずっと興味深かったのではないだろうか。まして、ウィリアムはニューポート滞在中にウィリアム・ハントのアトリエに通うようになり、芸術方面に進むことを考え始めていた。そのため、翌年のヨーロッパ滞在中にハントの下で絵を勉強するための帰国を父に願ひ出ているくらいであるから、このときは、さぞ心残りであったに違いない。

そもそも、このときの渡欧は、実は計画性に欠けたも

のなどではなく、ヘンリーたちには秘められた意図のもとに、実行されたものであった。ヘンリー・シニアは、ウィリアムが芸術方面に傾倒していくことを危惧し、ハントとの接触を断ちきろうと考えていたのである。⁽¹⁹⁾ 自発性や自由を尊重することを主張したヘンリー・シニアであったが、ここでは息子の意志を抑圧する専制君主的な父親でしかない。⁽²⁰⁾ こうした隠された意図がある以上、父の決定はどうしても不自然さをまぬがれないだろう。ヘンリーもウィリアムも表面上はともかくとして、内面では、この不自然な決定をそうたやすく受け入れたとは想像し難い。もし、ジェイムズがこのニューポートでの牧歌的な十五ヶ月を省略しなかつたとすれば、当然、再度アメリカを離れるに際してのペリーたちそしてジェイムズたちの心情に触れないわけにはいかなかったであろう。とすれば、ジェイムズがこの父親の隠された意図を後に知り得たかどうかは不明であるが、どちらにせよ、父親の専制君主的側面を意識せざるを得なかつた筈だ。しかし、この十五ヶ月間の省略によって、ジェイムズは父との対峙を巧みに回避したのである。

4 孤独なヨーロッパ

さて、ここで、ジェイムズのヨーロッパ滞在の極めて特異な側面をとりあげねばなるまい。それは先に触れた孤独という問題である。まず第一にジェイムズ一家全体がヨーロッパ滞在中ほとんど周囲との交流をもたなかった事実がある。ロンドンで、一家が滞在した場所は、芸術家や文人たちが好んで集うとされている地域であったが、そこに住んでいたからといって、必ずしもそういう人々と親交があったということにはならない。ヘンリー・シニアはカーライルやサッカレー、その他文士とつきあいがあったようであるが、エマソンにカーライルには失望したと書き送っている他、後にこのときのロンドン生活の印象に基づいて書かれた文章には、イギリス人の気質的な冷淡さに落胆したことが綴られており、必ずしも社交面においては満足のいくものではなかったように思われる。ジェイムズ自身、「我々は、全く他の少年を知らなかった……本質的に粗野な人たちを除いては他の人に会うことすらなかった」(一七四)と述べていることから、一家を訪れてくる客もなく、おそらくイギリス

人と意味のある直接接触はなかったと判断できるだろう。イギリスには八ヶ月も滞在したにも拘わらず、ヘンリーがイギリス人に直接接する機会をもったのは、他でもないフランスのフェザンディエ学校においてであったのは皮肉としか言いようがない。パリに移動してからも、状況は変化を見せない。ヘンリー・シニアは仏語は話せなかったため、訪ねてくる親類以外には社交関係が存在しなかった。ヘンリーたちにとっても、その従兄弟たちを除いては、全くつきあう相手がいない状態で、一八五八年八月二十五日付けの手紙で、母メアリーは「男の子たちは何にもまして、家でつきあう友達がいないのを寂しがっています。」と自分の母親に報告している。およそ十ヶ月あまりを過ごしたブローニュ・シュルメールでは、更に事態は悪化して、親戚も知り合いも全くないという有りさま、ジェイムズは「私のブローニュの記憶は家では、全くといっていいほど人とのつきあいがなかったということだ。」(二三三)と回想している。結局、ジェイムズ一家は、ヨーロッパ滞在中は劇場へ足を運ぶといったこと以外にほとんど外界との人的交流をもたなかったのである。

それでも、他の三人の兄弟は学校へ通うことができたため、それなりの外界との接触はあったと言えるだろう。しかし、ジェイムズの場合は、既に述べたように、病気を患ったせいで、学校へいくこともままならなかった。スイスの寄宿学校も行かず終い、プロニュ・シュルメルでも、他の三人はバリから戻った後もコラージュ・インペリアルに通い続けたが、ジェイムズだけは帰国までずっと一人で家庭教師から教育を受けたのである。従って、学校に通ったのはバリで一八五六年秋から翌年初夏にかけてフェザンディエ学校に通った四、五カ月間と、プロニュで、チフスにかかるまで通ったコラージュ・インペリアルでの数週間だけであった。三年間のヨーロッパ滞在で学校に通った期間は半年余り、残りの期間は家で家庭教師から学んでいたということになるが、このことは、些細なことのように重大な意味を持つ。この事実は、ジェイムズはヨーロッパ滞在中、家族と家庭教師以外には、他者とりわけ同世代の他者と交わる機会をもたなかったといういささか異常な状況を意味するからだ。

この状況が、ジェイムズの問題に及ぼす影響を及ぼ

したかを、ここで論じ尽くすことは不可能であるが、ジェイムズがヨーロッパで過ごしたこの時期が、発達心理学上、青年が親から心理的に独立する過程として「第二の分離個体化期」という概念で説明される時期にあたり、このことを考え合わせ、いくつかの方向を示唆することができるだろう。発達心理学によれば、この時期は、単なる遊び友達とは異なる内面的結びつきをもった友人、同性同年輩者間における一対一の親友関係をつくる「個人的親密さへの要求」が生じ、そこで形成された友情が、それまで唯一の情緒的基盤、準拠集団であった家庭からの独立を促すという⁽²²⁾。自分とは別の価値体系のもとに育てられた他者との出会いは、異なった価値観の出現として、自分がそのもとで育まれた価値体系への客観的考察、批判を生み、それが親からの精神的乳離れへとつながっていくのである。このような個の確立の時期に、他者としての友人が全く存在せず、病気がちで家庭にいたることが多かったこと、まして職業をもたない父ヘンリーが絶えず家庭に存在したということから、父ヘンリーの存在は、ジェイムズが意識する以上に大きかったのではないかと推測される。また、家庭外の集団の中で、

彼を個人として認識してくれる対等他者との関係が存在しなかったということは、「自己」を構成する「他者」としての「自己」という側面の認識を妨げたのではないだろうか。それは『使者たち』のランバート・ストレサー、『鳩の翼』のミリー・シール、『金色の杯』のマガリー・バーバーなど枚挙にいとまないほど繰り返し作品の中に登場する「見ることに取り憑かれた主人公たちに反映されていると言えるだろう。

優れた伝記作家ラ・クレアは、こうした同年齢の友人との交際の欠如をジェイムズのヨーロッパ滞在のひとつの特徴として認識し、青年期における経験としては「歪んだ、不自然なもの」、ジェイムズの成長にあきらかに影響をもたらしたと指摘しながらも、ジェイムズの場合は「その独特の気質と才能」が「集団活動の要求に悩まされることなく解放されていること」を必要とするので、「ほとんど不運とは考えられない」とあっさり片付けてしまっている。また、エデルにしても、この点に十分な注意を払っているとは言えない。その主な理由は、これらの伝記作者たちは、ホリーの批判するように、ジェイムズの少年期を洞察しようとするときに、自伝的作品に

依存しすぎて、そこに書かれていることをそのまま鵜呑みにし、それが、晩年のジェイムズによって書かれたものであるということをほとんど意識していないからである。⁽²⁴⁾ ジェイムズ自身はヨーロッパで孤独であったことについて多くを語っていない。しかし、沈黙していることは、それを意識していないということにはならない。ジェイムズ研究家は長らくニューヨーク版選集に付された序文によってテキストの「読み」を呪縛されてきた。そして近年のジェイムズ研究史はその呪縛からの解放の歴史だったと言っている。同様に、「伝記的事実を考察する際、ジェイムズの人生の「読み」を規定する『少年とほかの人々』から解放されることが必要である。ヨーロッパ滞在におけるこの特異な側面を等閑視することなく、十分な光を当てたとき、我々はジェイムズの同性愛的傾向・兄との葛藤・父の影響といった問題を解明する手がかりを見いだすことができる筈である。

結

ジェイムズのヨーロッパ体験の回想は、ロンドンのホテルの一室の場面で始まった。少年ヘンリーは外部のロ

ンドンからは切り離され、一人きりで、ベッドに横たわりながら、ひたすら意識と想像力を働かせ、ヨーロッパを味わおうとしていたのであった。少年期の回想を綴った『少年とほかの人々』は、ヨーロッパ滞在の終わりをもって結ばれるが、その最終場面は、この最初の場面と呼応して、ヘンリーがチフスに罹って、一人ベッドに横たわっている場面である。ここでも、ヨーロッパは「半分開いた窓から聞こえてくるブローニユの通りの穏やかな活気」という形でしか存在しておらず、ヘンリーが眩暈によって「意識を失った」(二三六)時点で最後の文章が締めくくられる。ヘンリーのヨーロッパ体験を締めくくるにはこれ以上の終わり方はない。ヘンリーが実際に体験できたヨーロッパは、部屋の窓から病床に聞こえてくる音に象徴されるように、ごく僅かで、間接的であった。たとえば、病気で家からでられないヘンリーに外の世界の窓口になって「直接的な事柄」を伝えてくれたのは主にウィルキーだった。ウィルキーからの報告はヘンリーにとって「直接経験」の「代替物」(“substitute”)であったが、ヘンリーがそれを「思索の時間に、すなわち、私がそれとだけ向かい合ったとき」「内部に取り入

れることによって、かなり豊かなものにした」(一六二)のである。つまり、間接的な僅かなヨーロッパ経験を豊かなものに変えたのはヘンリーの意識、いやむしろ、ヘンリーの意識を語るジェイムズの意識と言った方がいいかもしれない。従って、ヘンリーのヨーロッパ体験がひたすら意識によって支えられている以上、病気のヘンリーが意識を失ったとき、ヨーロッパ体験も終結するのである。

(1) Christof Wegelin, *The Image of Europe in Henry James* (Dallas: Southern Methodist University Press, 1958), p. 38.

(2) 一八七二年十一月付ヘンリー・ジェイムズ・シニア宛書簡。Henry James Letters, ed. Leon Edel (Massachusetts: Harvard University Press, 1974), vol. 1, p. 307.

(3) 一九八三年一月八日付ウィリアム・ジェイムズ宛書簡。Henry James Letters, p. 323.

(4) Henry James, *A Small Boy and Others*, in F. W. Dupee ed., *Autobiography: A Small Boy and Others. Notes of a Son and Brother, The Middle Years* (1956; rpt. New Jersey: Princeton University Press, 1983), p. 158. 以下、この作品からの引用は同書に依り、本文中の

括弧内に引用頁数を記すことにする。和文拙訳。ジェイムズは「六月のイギリス」と記述しているが、ジェイムズ一家は六月二十七日以前に出航したとらうことはあり得ず、従つて六月であるはずはならぬと伝記作者ノヴァックは指摘してゐる。Seldon M. Novick, *Henry James: The Young Master* (New York: Random House, 1996), p. 461.

(5) 一八四九年八月付マンソン宛書簡。Leon Edel, *Henry James: The Untold Years: 1843-1870* (1953; rpt. New York: Avon Books, 1978), p. 118. 以下引用はすべてこの書。

(6) *A Small Boy and Others*, p. 155, p. 110.

(7) Robert Le Clair, *Young Henry James: 1843-1870* (New York: Bookman, 1956), p. 173.

(8) *Notes of a Son and Brother*, in F. W. Dupee ed., *Autobiography: A Small Boy and Others. Notes of a Son and Brother, The Middle Years* (1956; rpt. New Jersey: Princeton University Press, 1983), p. 239. 以下この作品から引用は同書に依る。

(9) William James ed., *The Literary Remains of Henry James* (1884; rpt. New York: Houghton Mifflin, 1970), p. 179.

(10) *The Literary Remains of Henry James*, p. 178. 和文拙訳。

(11) 『ある婦人の肖像』のヒロイン、イザベル・アーチャーはまさしくこのような自由な精神を体現しており、イザ

ベル像創造にあたっては、最愛の従姉妹ミニー・テンプルの存在だけではなく、父ヘンリーの思想も影響を与えていると考えられる。

(12) ジェイムズが「ある特定の場所にいること」と当時のアメリカ社会の「ロジネス」とらう理想との関わりを強く意識してゐることは興味深き。 *A Small Boy and Others*, p. 305.

(13) 一八八四年十一月四日付マンソン宛書簡 Ruth Yeazel ed., *The Death and Letters of Alice James* (Berkeley: University of California Press, 1981), p. 148.

(14) たゞし、*Notes of a Son and Brother* では「我々の出発後まだ五年半たつた一八六〇年の終わり頃、アメリカに帰国した」とらう記述を多少隠蔽を行っている。

Notes of a Son and Brother, p. 175.

(15) Edel, *Henry James*, pp. 137-38.

(16) Le Clair, pp. 281-82.

(17) *Notes of a Son and Brother*, pp. 294-97.

(18) この別れについてジェイムズたちの印象は残されてゐるが、ヘリーたちがひどく別れを悲しんだという記録は残されてゐる。 LeClair, p. 292. 次に掲げるアメリカ人の帰国決定をヘリーに知らせる一八六〇年七月十八日付の手紙には歓喜が溢れており、ここから逆に別れの心情を推測することができるだろう。和文拙訳。

僕の一番大きな大砲をならさなくちゃいけないね。ワン・

ツ・スリー! バン・バン・バン……!!! な
んて音! 僕たち、アドリアティック号乗船が決まったよ、
九月十一日! ……!!! すぐにニューポートに向かうよ、
だってアメリカで僕らみんなが一番住みたいところだから
よ。(Henry James Letters, p. 22)

(19) Le Clair, p. 323.

(20) また次の一八五九年九月十八日付サミュエル・ウォー
ド宛の手紙の一節からも、帰国後友人たちとの交際によっ
て精神的に親から自立しつつある子供たちを前にした父親
の内的葛藤を嗅ぎとることができる。和文拙訳。

私は、当地で子供たちが受けている教育には大変がっかり
していますし、子供たちがアメリカの若者の特徴であるら

しい浪費と不服従の習慣を必然的に身につけてしまうのを
とても恐れています。ですから、またヨーロッパに戻って
子供たちをもう二、三年そこにおいておこうという結論に
達したのです。(Le Clair, p. 291)

(21) Le Clair, p. 218.

(22) 斉藤誠一『人間関係の発達心理学四青年期の人間関
係』(培風館、一九九六年)、一九一―二頁。

(23) Le Clair, p. 218.

(24) Carol Holly, "The Autobiographies: A History of
Readings," in *A Companion to Henry James Studies*, ed.
Daniel Mark Fogel (Connecticut: Greenwood Press,
1993), pp. 428-31.

(一橋大学専任講師)